

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』(10)

訳 武田将明
Takeda Masaaki

閉鎖されてから、いわば策略をめぐらせて家を出た人が多くいたように、監視人を買収し、金を与えて夜にこっそり出ていくのを認めてもらう人たちもいた。本音を言うと、これは腐敗、つまり賄賂のうち、もっとも罪のないものだと当時では考えていた。それだけに、閉鎖された家から人が出るのを認めた^{かど}廉で、三人の監視人が鞭打たれながら市中を引き回されるのを見たときは、哀れな男たちに同情し、ひどいと感じるばかりだった。

しかし、こんな厳しい対応の甲斐もなく、貧しい者たちは金で丸めこまれた。閉鎖されたあと、多くの家族がこうして家を飛び出し、逃亡した。でもそれは主に避難する場所のある人たちだった。八月一日から、どちらに行くのも簡単ではなくなったのだけど、それでも逃げ道はたくさんあったし、前に触れたように、テントを手に入れて野外に設置し、寝床かその代わりに麦わらを運びこみ、食べ物も蓄えて、ずっと中で暮らす人も

いた。それは独房にこもる修道僧みたいだった。なにしろ誰も近づこうとはしないのだから。こんな人たちについて、いくつもうわさがあった。笑ってしまうものもあれば、悲しいものもあった。砂漠をさまよう巡礼者のように生き、およそ信じられないやり方でみずから流浪の民となった人もいたものの、そのわりに案外と自由な暮らしを楽しんだらしい。

この手の話でぼくが知っているのは、二人の兄弟とその親類をめぐるものだ。三人とも独身の男だったが、市内に長く留まって逃げ出せなくなった上に、どこに避難したものかも分からず、遠く旅する元手も持たなかったために、止むに止まれずある道を選んだ。当初は無謀にも思えたけれど、実はごく当然のやり方で、当時ほかに誰もしなかったのが不思議なくらいだ。この人たちはいずれも身分は低かったけれど、体と心をもとに保てるほどのわずかな物資にも困るほど貧しくもなかった。恐ろしい勢いで病魔が広まるのを目にして、三人はどうにかして住まいを移し、病から逃れることに決めた。

このうち一人は先の戦争に従軍し、その前の戦でもオランダに行っていたのだけど、¹ 武器を使うほかなにも職業の訓練を受けてこなかったし、さらに負傷して激しい労働はできなかったために、しばらくは波止場のあるウォッピング地区² で船員向けの乾パンを焼く店に雇われていた。

¹ 「先の戦争」はスペインとの戦(1655-59年)を指す。本作は主に1665年の出来事を扱っているので、すでに五年以上も経っていて、政体もクロムウェルの共和政からチャールズ二世の王政に変わっている。その前のオランダとの戦争(第一次英蘭戦争)は1652年から54年に起きている(Backscheider 51; Landa 268; Mullan 232)。

この男の弟も船乗りだったが、なにかの理由で片足を怪我してしまい、海に出られなくなっていた。それでもウォッピングかその辺りにある帆の製作所で働いて生計を立てていた。なかなかの節約家で、多少の金を貯めていて、三人のなかではいちばん金持ちだった。

三番目の男の仕事は指物師だか大工だかで、手先が器用だった。この男の財産と云ったら、道具箱というか籠ひとつだった。このおかげで彼はいつでも（いまみたいな非常時は例外だが）、どこに行っても生計を得ることができた。彼はウォッピングの北にあるシャドウェル地区に住んでいた。

彼らは三人とも市街地より東のステップニー教区に住んでいた。前に話したけれど、ここまで病魔が達したのは、いや少なくとも猛烈に流行したのは、いちばん遅かった。ペストがロンドンの西側で鎮まり、自分の暮らす東側めがけて来るのがハッキリと見えるまで、彼らはそこに留まっていた。

この三人の男の話は、ぼくがこの人たちになりすまして語りたい。ただし、細かい点まで正確であると保証はしないし、なにか誤解があっても責任はとらない。読者のきみがそれでよければ、ぼくはできるだけ判りやすく語ることにしよう。この物語は、いまここで同様の惨事がみんなに降りかかることがもしあれば、とても役に立つ事例となり、貧しい人がみんな倣えるはずだから。いや、そんなことが起こらないとしても——果て

² ウォッピングとは、ロンドンのテムズ川北岸にある一地区を指す。水運が盛んだだったので、長期の航海に出る船員用の保存食として乾パンを売る店があったのは自然である。なお、医師として働いていた『ガリヴァー旅行記』の主人公は、小人の国まで漂流する前、やはり船乗りの治療目当てに一時ウォッピングで暮らしている。

しない憐れみの心を持つ神よ、お護りください——このお話はかなり多くの方面に活用できるから、ここで披露することが無駄になることは決してないだろう。そうだといいのだけど。

物語の前にこんなに話してしまった。けれどまだしばらくは、ぼく自身の体験談から聞いてほしいことがたくさんあるから、そっちを続けよう。

はじめのころはずっと、ぼくは気ままに通りを行き来していたけれど、明らかに危険な場所に飛びこむほど気ままというわけじゃなかった。ただし地元のオールドゲート教区の教会墓地³に巨大な穴が掘られたときは例外だった。それはおぞましい穴だったので、見に行きたいという好奇心に逆らえなかったんだ。ぼくの目で判断したかぎりでは、長方形の穴の全長は約40フィート[約121センチ]、幅の方は約15から16フィート[約457から487センチ]あった。また最初に見物したときには、約9フィート[約274センチ]の深さだった。けれどももうわきでは、後でその一画を20フィート[約609センチ]まで掘ったのだけど、地下水が出てくるのでもっと深くはできなかつたらしい。どうやらこの穴より前に、いくつも大きな穴が掘られていたみたいだ。というのも、ぼくらの教区にペストが来るまでは長くかかったものの、⁴一度来てしまったら猛烈に暴れ

³ この穴はオールドゲートの外にあるセント・ボトルフ教会の墓地に実在した。この教会はデフォーが結婚式を挙げた場所でもある(Mullan 232; Backscheider 53)。

⁴ 実際の死亡週報によれば、オールドゲート教区で最初にペストによる死者が出たのは1665年6月27日から7月4日の週だった。このときには、130の教区のうち33がすでにペストに冒され、毎週の死亡者数は全体で470名だった(Landa 268)。

まわり、ロンドン市内でも市の周辺でも、オールドゲートとホワイトチャペルの二教区ほどひどかった地域は他にないほどだったんだから。⁵

たしかに、別の場所にいくつも穴が掘られていた。ぼくらの教区で病が広がりはじめたころ、なかでも死の車^{デッド・カート}が行き交うようになったころのことだった。このときもう八月のはじめに入っていた。この穴のそれぞれに五〇から六〇の遺体が放りこまれた。つぎにもっと大きな穴が作られ、一週間で車の運ぶものすべてがそこに葬られた。その数は八月の中旬から終わりにかけて、週二〇〇から四〇〇体に至った。これより広く深い穴は掘れなかった。行政の命令で、地面から6フィート[約183センチ]以内の深さに遺体を埋めてはいけなかった。さらに17から18フィート[約518から548センチ]も掘れば地下水が湧いてきた。そんなわけで、一つの穴にこれ以上を押しこむのは難しかった。けれど九月のはじめともなると、ペストは恐ろしいほど猛威をふるい、ぼくらの教区で埋葬した数は、おなじくらいの広さならば、ロンドン周辺のどの教区でも過去にないほど多くなった。そこでこのおぞましい深淵を掘るように命令が出たのだ。それはただの穴じゃなく、まさに深淵だった。

この穴で一ヶ月かそこらは賄えるだろう。掘った当初はそう

⁵ この二つの教区は、ペストが猖獗^{しょうけつ}を極めた1665年7月から9月における死者について、たしかに最悪の数字を残しているが、全期間でペストにより亡くなった人の数はステップニー教区の方が多。この年のステップニーでの死亡者は6583名、オールドゲートでは4051名、ホワイトチャペルでは3855名だった(Landa 268)。

思われていた。教区の間をまるごと埋める準備でもしてるのか、などと言って、こんな恐ろしいものを許可した教区の役員を非難する声さえあがった。けれど時間とともに、教区の役員は文句を言う人びとより教区の実情を知っていることが明らかになった。この穴はたしか九月四日に完成し、六日に遺体を埋めはじめただけで、二十日には、つまりたった二週間で一一四体を投げこみ、もう土を被せなければならなくなった。すでに遺体が地表から6フィート[約183センチ]以内を覆うようになったからだ。この教区には、これが本当だと証言してくれるだけじゃなく、教会墓地のどの場所にあの穴があったのか、もっと詳しく教えてくれるお年寄りがまだ生きているに違いない。また教会墓地では、長く続く地面に穴の跡を何年経っても見ることができた。ハウズディッチ通りから北に分かれ、墓地の西壁に沿って走り、また東に折れてホワイトチャペル通りに出ると、ちょうど「三修道女」亭^{スリー・ナUNS}の近くに至る小路があるけれど、これと並行して穴の跡が見えていた。

好奇心に導かれて、というより駆り立てられて、この穴をふたたび見に行ったのは、九月十日ごろのことだった。もう穴には四〇〇人近くが埋められていた。ぼくは、前とおなじように日中に穴を見るのでは物足りなかった。昼間では締まりのない土しか見えないと思ったのだ。投げこまれた遺体は、埋葬人と呼ばれる人たちの手で、すぐに土で覆われたから。埋葬人は運

⁶ この酒場兼宿屋はオールドゲート教区に実在し、馬車の馬を替える設備もあって栄えていた(Mullan 219; Backscheider 53)。ネットの情報によれば、1960年代までは存続していたらしい。
(<http://deadpubs.co.uk/LondonPubs/Aldgate/ThreeNuns.shtml>)

搬人と呼ばれることもあった。だったら、夜に行って何体か投げこまれるののころを見てやろう、とぼくは決心した。

こうした穴に誰も近づかないよう厳しく命じられていたが、その目的は単に感染を避けるためだった。けどもしばらくすると、この命令は別の意味でも必要になった。感染し、最期が近づき、正気さえも失った人たちが、毛布かベッドの上掛けにくるまって穴に駆け寄り、そのまま飛びこんで、当時の言い方で「自分を葬る」ようになったからだ。誰だろうと、みずから進んであそこに埋められようとするのを役人が容認したなんて、とても言えない。でも聞いた話だと、もっと西のクリップルゲート教区、フィンズベリーにある巨大な穴では、周りを柵で囲んでいなかったから、すべてが外に剥き出しだった。そこに病人が来ては飛びこみ、まだ土をかけられないうちに息絶えたんだ。遺体を埋めに来た人が彼らを見つけたときには、すっかり死んでいたけれど、まだ温かかったそうだ。

これは当時のおぞましい状況を説明するのに少しは役立つかもしれない。でもなにを言おうと、あれを見なかった人に、あの本当の姿を伝えることはできない。せいぜいこう言うしかない。あれは本当にとってもととてもととてもおぞましくて、言葉では表現できないと。

(東京大学准教授)